平成 29 年度　第 4 回　松戸市子どもの未来応援会議　会議録（要旨）

1.　日時　　平成 30 年 1 月 15 日（月）　午前 10 時～11 時 30 分
2.　場所　　松戸市衛生会館 3 階大会議室
3.　出席者　＜委員＞　10 名
阿部委員、須田委員、湯浅委員、沖委員、石井委員、
山田委員、郡委員、町山委員、波田委員、胡内委員
＜松戸市＞
子ども政策課、子育て支援課、子どもわかもの課、幼児保育課、
行政経営課、政策推進課、商工振興課、健康福祉政策課、
生活支援一課、住宅政策課、教育企画課、学務課、指導課、
保健体育課、教育研究所、子ども家庭相談課
（事務局：子ども家庭相談課子どもの未来応援担当室）
4.　傍聴者　　2 名
5.　議題　　(1)「松戸市子どもの未来応援対策について（中間報告）(案)」について
(2) その他

＜要旨＞
(1)「松戸市子どもの未来応援対策について（中間報告）(案)」について

(会長)
「松戸市子どもの未来応援対策について（中間報告）(案)」について、説明をお願いしたい。

(事務局)
資料 1 :「松戸市子どもの未来応援会議における主な意見等一覧」を用いて説明
(○○委員)
資料 2 :「松戸市子育て世帯生活実態調査分析中間報告（追加分)」を用いて説明
(事務局)

資料３:「松戸市子どもの未来応援対策について（中間報告）（案)」を用いて説明

（会長）

ただいま事務局から説明があった「松戸市子どもの未来応援対策について（中間報告）（案)」について、事前に皆様にはこの前のバージョンをお送りしている。いただいた意見を加筆、修正したものを、本日初めてお示しした。

先ほど〇〇委員から説明していただいたデータだが、これは３の支援制度へのアクセスの在り方について関係するもの、必要性を裏付けるものになっているのではないかと考えている。

皆様からご意見、ご質問をお願いしたい。

＜質疑応答＞

（委員）

中間報告の取りまとめに感謝する。何点か補足的に付け加えていただければと思うものがある。

１点目、１　子どもの未来を支援する地域づくりの〇の一つ目だが、官民協働を促進し、住民による発見力を高め、そして住民による解決力もつけていくといった視点が必要である。前回、これに近いことを言ったと思うが、言葉足らずだったかもしれないので少し補足する。住民による発見力は重要で、発見力は住民の方があるかと思うが、解決力は主に行政がもっている。ただ、それが徐々に住民自身による解決力もついていくのは望ましいが、それはなかなか難しく行政支援があってのことである。官民協働の中で、一緒にやっていくことでついていく面があるので、ここはできれば「住民による解決力もつけられるよう行政が支援していくといった視点が必要である。」に変更していただければありがたい。

２点目、次の〇で、「また」以降だが住民間の接点を多くするため「安心して声をかけあえる」地域にする必要がある。その通りだと思うが、表現の仕方なのでこれだと違うと言うつもりはないが私としては「そのために、地域住民と子どもたちが知り合うことのできる接点（タッチポイント）を積極的に増やしていく必要がある。」という方がしっくりする。そこは表現の仕方なので検討していただければと思う。

３点目は、新たな担い手を含めて地域全体で子どもの未来を応援するといった視点が必要だというところで、その通りである。〇〇委員が分析されたものをみると、体験の不足など顕著に出ている。また、この中間報告は住民の皆さ

んにみていただきたいものでもある。あまり細々としたことを書き込むのは中間報告の趣旨ではないと思うが、もう少しイメージをもってもらえる表現があったらいいなと思っている。たとえば、「生活困難層に不足しがちな体験の提供、家庭の思い出づくりなどは、多様な市民が担い手となりえる。」といったようなことである。どこかに連れて行くとか、バーベキューを一緒にやるなどのことは、一般には子どもの貧困対策に結びついていないのでは、と思われる。しかし、結構、大事であり、イメージを持ってもらうために例文みたいなものが一つ入ると、こういうことなら出来るかもという住民が出てくる可能性がある。そうなると良い。

２　子どもの居場所とその充実についてであるが、冒頭が「学校や家庭以外に、」と始まっているが、学校の機能も居場所づくりとしては大事なので、出来ればこの部分で例示されている「学校や児童館、こども館等がさらに地域に開かれていくことで、交流拠点としてのプラットフォーム機能を充実させていくべきである。」といった言葉が入るとよいのではないかと思った。特に松戸は、事件の記憶が新しいと思うので、若干、積極的に広めていくことに対する懸念や抵抗感をもしかしたら持っている方もいるかもしれない。そこで委縮してしまうと、それによるデメリットもまたあるので、敢えて書いておきたいという気持ちもある。

４　学校・教育の重要性についてのところであるが、〇が２つ出ているが、３つ目として「〇子どもと家庭に対する適切な対応を可能にするため、子どもの学力や動向に関する小中学校間での情報の統合が必要である。」というのをできれば入れていただきたい。これは〇〇委員の専門なのでおられたら良かったのだが、今回の調査でも本人たちはいつから学校の勉強がわからなくなったとか回答している。これを裏付ける資料を学校側も持っている。多くの自治体で、小学校の情報が中学校で途切れてしまったり、中学校で勉強がわからなくなった時に小学校にさかのぼってカルテのようなものが見られなかったりしている。学習面でのサポートでも資する面があるのではないかと思うので、小中学校間の情報連携はあると良いのではないか。

６　子ども・妊産婦を含む親の健康の確保についてのところでは、１つ目に母子保健や育児に切れ目なく支援していくということが書かれていて全く異存はない。しかし、母子保健や育児だけではないと思う。切れ目ない支援はトータルなところで入れられないか。その他になるのか、どこに入るか具体的には判断できないが、「行政は、あらゆる機会を捉えて、支援が必要な子どもの情報が部署を超えて引き継がれ、共有されるような仕組みづくりを推進すべきである。」ということを入れていただけたらと思う。乳幼児健診の情報が保育園等に通う時に活かされる、あるいは保育園の時の情報が小学校に入るときに

活かされる、中学校の時は小学校の時の情報が活かされる。年代を超えて部署を超えて引き継がれていかないと、どうしてもその場その場の対応になってしまう。先ほどの母子保健や育児に関する切れ目ない支援に重なるが、それよりさらに広い枠組みでこの切れ目なさを作っていく。そのために、部署を超えた連携をしていく行政側の姿勢も示していただければと思い、今日見て付け足したいと思った。

（委員）

少し細かいところであるが、生活困難層と困窮層という言葉は使い分けているのか。例えば、2ページの2番の1行目は困難層で、3ページの4番2行目は困窮層という言葉を使っている。

学校現場から見た時どうかという観点でみる癖がある。この会議で、スクールソーシャルワーカーのことについて大変重要であるという位置付けをされたということは、非常に重要だと思う。おそらく、学校は非常に重要な情報の収集あるいは伝達の場であり、機能しなければならないが、すべて先生に任せるというわけにはいかない。今、実験的に六実地区で始まっているが、スクールソーシャルワーカーがいかに効果的であるか、いかに拡充していくかということをぜひ強調していただきたい。

私は現状がわからないが、民生委員、児童委員の方々が、どれくらい地域の子ども達や家庭のことを知っているのかは、プライバシーの問題があり話さないのでわからない。難しいところだと思う。先ほど〇〇委員からもあったが、住民による解決力と言ってもなかなか解決できない。解決する力はやはり行政がもっているという中で、学校も子どもたちの何かについて発見すると同じように、民生委員、児童委員の方々がどのような役割をなすのか。おそらく、地域の情報を何らか見聞きした初動の段階で、どこかにその情報を伝えるという受け皿が何なのか。そこは市役所の福祉の部門に直結するのか、もしくは各学校のスクールソーシャルワーカーの方がいればそこに集まるのか。これが先生ということになると、きめ細かい対応にまでつながらない。今日、追加報告していただいた福祉サービスにどうつなげていくか、福祉の手助けがあるのに利用されないという方について、そのハードルを低くしてあげることを誰がやるのか。民生委員、児童委員の方がやるとなると、プライバシーの問題もあり相談もしづらい。近所のおじさま、おばさまだったりするので、そういった時にどうしてもスクールソーシャルワーカーというものがあるのだろうと思っている。

2ページの1　子どもの未来を支援する地域づくり、〇の三つ目。民生・児童委員、書いてはないが子供会、町会・自治会も含むということか。子供会も

人数が少なくて、活動が停滞している。頑張って自分の子どもが卒業してからも子供会の会長をしている方もいる。そこをどう行政が応援するかということと、その情報の行き先が何なのかというところで、スクールソーシャルワーカーが有効だと思う。

（会長）

今の〇〇委員の発言の関係で、事務局の方から補足的な説明などあるようであればお願いしたい。地域まるごととか、コミュニティーソーシャルワーカーなどを受ける受け皿みたいなものを作っておこうという模索する動きもあるように思うが、いかがか。

（事務局）

地域まるごとという視点では、どちらかというと相談窓口の縦割りで推進してきた。現在、子育て世代包括支援センターである親子すこやかセンターと、高齢者の窓口、障害者の窓口とで情報交換をしつつ、住民の方が発見して下さったことをなるべくキャッチしようという動きも、少しずつ模索している。また民生委員の方からの情報は、行政間の他部門にもつなげようという検討を今、始めているところなので、もう少し模索していく期間であると感じている。

（会長）

そのような方向性を持っているということは、委員の皆さんで共有する方が良いかと思い、一言申し上げた。

（委員）

事務局の方々が送って下さった時にコメントせず、今となってしまい申し訳ない。いくつかのカテゴリについてと細かい点について、この位置づけでの方向性ということなのでこのようなカテゴリになるのかと思う。全部必要なことが書いてあるが、では松戸市として何をするのか。方向性というのは必要である。それで終わって良いのか、もう少し積極的に書けないのかと思う。中間報告の段階でも書けないのか、読んだ後にこれだけ検討して、こんなに調査した後で寂しい感じがする。

その上で、もちろん良し悪しはあるので具体的にどこまで書けるのかというのもあるが、主に 4 の教育のところである。

１つ目が、学校の授業の理解に問題を抱える子どもは少なくない。特に親に勉強をみてもらえない割合が高い。困窮層で多く見られる傾向にある。ここで事実ではそうだが、「とくに親に勉強をみてもらえない生活困窮層」と言

う必要がなぜあるのか。つまり、学校の授業の理解で問題を抱える子どもは、親に勉強を見てもらえないのは暗黙の了解みたいなところはある。おそらく、それと関係なく、学校現場、行政、国で、子どもの学力を保障する。それなら、なぜこの文言をわざわざ入れる必要があるのかと思う。

もう１つ、２つ目の〇が重要。全体的に、福祉分野に偏っている感じがある。スクールソーシャルワーカーはもちろん重要ですし、今モデル的に始めているということで、報告したいというのもわかる。しかし、一番重要なのは、学力保障だと思う。そういう中で、この１行がサラッと書かれている。もう少し教育的な措置が必要である。先ほどのスクールソーシャルワーカーの話しもあり、学校の先生が福祉的な措置をするのは大変だが、学力を保障するのは学校の先生の役割である。そこをもう少し書いていただきたいことと、もう少し踏み込んで書けないのかと思う。あともう一つは、「将来進学に結びつくような」というところ。学校での最終的な目標は、将来進学に結び付けることかと言ったらそうではない。なので、ここで「将来進学に結び付くような」と入るのが気になった。中卒というのは今、難しいかもしれないが、基本的には自分で自立していく力を司るというのが義務教育だと思われる。そのような観点で気になった。

もう１つは、5　ひとり親家庭への支援の１つ目の〇のところ。ライフプランについて書かれている。全体的に抽象的に書かれている割に、ここはセミナーなどを通じて働きかける必要があると書かれている。これを読んでしまうと、一般市民の方はひとり親の家庭の方々の親御さんはきちんとライフプランを立てていないから、スキルアップできるようにキャリアスキルアップ講座を開けばいいのかと思うだろう。そうではなくて、スキルアップなんてできる状況ではないと思う。ひとり親の家庭のお母さんは、その時の生活をするのに精一杯といった状態なので、スキルアップによる収入確保の準備を始めることが重要なのではなく、スキルアップによる収入確保の支援を行うことが必要であるというように書き換えていただきたい。

（会長）

最後のところは、前回、〇〇委員の発言をそのまま入れたところではないかと思われる。〇〇委員との調整が必要かと思うが、その点を受け止めていただければと思う。

他にないようなら、本日、欠席委員からコメントがメール等で寄せられているので、事務局の方からこの時間を利用して、また議論活性化の意味も込めて紹介をお願いしたい。

（事務局）
　本日、欠席されている〇〇委員、〇〇委員、副会長、〇〇委員から文書にて意見をいただいているので、事務局から報告させていただく。
　まず、〇〇委員。松戸市におけるひとり親家庭の就労収入も低く、正規社員割合も低く、ひとり親の問題はかなりあることが「子育て世帯生活実態調査」からもわかった。ひとり親世帯に対しては、何らかのインパクトを持った施策を打つべきだと思われる。
　ひとり親家庭への支援として、いくつかの事業案をいただいた。主なもの 4 点を紹介する。
　①孤立防止のためのひとり親家庭の親子の生活支援交流事業
　母子世帯になりそうな直後に情報が得られ、孤立しない、相談先が複数ある、という状態が望ましい。そのためには、親子の交流事業は有効である。
　②ひとり親のためのセミナー事業
　ライフプランを早期に立てて、前向きに仕事をしていく気持ちになれるセミナーが必要。
　③相談事業では、母子自立支援員の相談スキルの向上が必要
　ひとり親の方の気持ち、暮らし、仕事、子育てなどについての相談が受けられるような、スキルを身につけていくことが求められる。
　④ファミリーサポート事業の改善
　ファミリーサポートセンター事業についても、就労と子育てのワークライフバランスを図るうえで、大変重要である。
　〇〇委員からは、主に以上 4 点の意見をいただいた。

　次に〇〇委員。〇〇委員からは、児童福祉法に基づいた意見をいただいた。
　児童福祉法の平成 28 年改正により、すべての子どもは、「適切に養育されること、その生活を保障されること、愛され、保護されること、その心身の健やかな成長及び発達並びにその自立が図られることその他の福祉を等しく保障される権利を有する。」とされた。子どもが権利の主体である。そのような権利を、保護者、行政、市民が、ともに力を合わせて保障する責務がある旨の記述があっても良いのではないか、という意見である。

　続いて、副会長。
　この中間報告書が出されたこと、その内容を「子ども子育て会議」に上げ、子どもに関する会議として連携を図っていくということである。
　副会長は、松戸市における子ども子育て支援に関する総合的な計画を審議する「子ども・子育て会議」の会長を務めておられる。

最後に、〇〇委員からは、主に 2 点の意見をいただいた。

まず受動喫煙については、子どもの健康に多大な悪影響を及ぼすことが知られている。家庭環境の中で喫煙状況を把握し、明らかにしていき、喫煙をしている両親には禁煙等の啓発が必要である、ということである。

2 点目。子どもの世代だけでの問題として子どもの貧困問題を捉えるのではなく、全世代に跨った横断的な視点が欲しい。例えば、親子すこやかセンターと既存の地域包括センターとの合同カンファレンスなどで、横断的な問題を内包している症例を検討する機会があっても良いのではないかと考える、とのことである。

事務局からの報告は以上である。

（委員）

意見というより感想に近いかと思う。同じような会議は多いが、その中で嫌というほど出てくるのが窓口のワンストップ化とか情報共有である。そのようなことは必要だと充分わかってはいても、なぜ 20 年前 30 年前から言われていることが実現できないのか考えた時に、何か理由があるかと思う。これはあくまで推測だが、なぜ相談窓口の一本化という声が出てくるのかというと、市民が相談へ行った時にそこで解決されないからである。なぜ解決されないのかというと、相談を受けている人が自分の持っている知識の引き出しにあてはまるものがあれば解決されるが、そうでないと解決されないからである。一個人が持っている知識の引き出しは少なく、解決できることの方が稀である。その時、どうなるのか。良し悪しは別として、現実はここで止まってしまう。行政に限らず、民間の相談機関も含めスタッフの保身もあるのかと思う。制度で守られていることであればそれなりの対応はするが、制度からちょっとはみ出たものは、相談を受けた人の熱意、情熱、本気の思いというのが必要になってくる場面があるのかと感じている。

情報の共有化もそうだが、これはすごく壁が厚いと思う。例えば、松戸市にも要保護児童対策地域協議会があり、いわゆる社会的養護が必要な子どもをどう支援していくか話し合っている。児童虐待の関係なども入っている。虐待の関係などは、一歩間違えると子どもが亡くなるということもある。そのような時でさえ、各部門間の連携は極めて難しい。例えば、入学式に来られなかった子どもがいた時に、理由がはっきりしていれば別だが、理由もなく卒業式、入学式に来ないことはそれだけでハイリスクなことである。では、虐待を扱っている市の部署にそのデータがきているのか。たぶん今でもきていないと思う。別に教育委員会がどうこう言っているのではなく、逆の場合もあるし、他の部

門間でもあるし、民間の中にもたくさんある。そこで、やはり１つは保身もあるだろうし、もう１つはそこまで思いが至らない、想像がしにくい現実があるのかと思う。そのようなことも含めて、前回も話したが、子どもに関係する人たちの人材育成が必要である。意見というか感想に近い感じである。

（会長）

これまでなかなか破れなかった壁を今回何とか破ろうという思いで中間報告が作られているかと思う。今の思いというのは、ここに関係の部署の課長がいらっしゃっているので、うまく受けてくれるのではないかと思う。それから、スタッフの人材育成もこの中に書いてあるので、具体的に次のステップへつながるよう、その質をみていくことが大切だと思っている。これまで、このような子どもの居場所が大変不足しているという問題はあまり議論されていなかった。そもそも、松戸市で子どもの貧困問題を取り上げること自体初めてである。そういった視点からも、この重要性が改めて認識されたというのは、調査も含めて対応してきたことの成果ではないかと思っている。

〇〇委員、せっかく出席していただいているのでいかがか。

（委員）

中間報告自体は、子どもの未来応援なのでどちらかというと大人目線で書かれている。子どもの立場に立って、子どもに対するメッセージとして「君たちはこうなれるのだよ」「こういう支援が受けられるのだよ」というように考えてみると、もう少し具体的に到達目標や指標みたいなものが出てくるのかと思う。ゴールがどこにあるのか見えにくいので、この後、計画を立てる時に指標が必要になってくると思うが、評価しづらくなってしまうかもしれない。子どもに対するメッセージみたいなものがあると、指標にもなるし未来のことを応援しているよと言えるのではないか。どちらかというと保護者、親の支援になってしまうのかと思うが、子どもに対してメッセージがあっても良いのかと思う。

（委員）

私は学校教育に関わっているので、学校教育の視点と全体的な視点で話しをさせていただければと思う。

まず全体的な視点だが今、〇〇委員からの話しと重なるところもある。事務局の方から、１ページ目の１　はじめにの部分について簡略化されたが、私はここは重要な部分ではないかと思っている。読んでいくとどうしても貧困対策に特化してしまっている。まずは「すべての子どもたちが未来に向けて夢や希

望を持っていけるのだ」というようなことを書くと良い。「生まれ育った環境により左右され」というのではなく、それよりまず、「全ての子ども達が是非、未来に向けて夢や希望をもって欲しいのだ」と大人の大きな願いがあるということ、その実現のために私たちがどんなことをしていくのか、という書き出しになっていくと良いと思う。

教育の部分については、それぞれの委員からご指摘をいただきありがたい。特に、学力の考え方は、やはり進学を目標として持つべきではないと私も思っている。学校教育法の中に書かれているいわゆる学力三要素は、当然、必要になってくる。もちろん、学校や地域などさまざまな部分から学習を通して知識や技能を身に付けるということは必要だ。その前段に、学んでいこうという意欲を子ども達に身に付けさせるべきだろう。これからの世の中は、学んだ力をどう活かしていくかということの方が重要だと思うので、この観点からいうとゴールは高校進学や大学進学ではないと思っている。

〇〇委員からは、再三にわたりスクールソーシャルワーカーの重要性についてご指摘いただいている。どうしても、教員が一番で、教員がいろんなものを情報として持っていて、その手助けを皆さんがして下さるという感覚が今までのあり方だった。やはり、学校における課題が複雑で多様化しているので、是非、専門性をどう活かすかという視点が必要である。専門家の１人として、子どもたちを支援するスクールソーシャルワーカーがいる。その他にも、福祉や医療も含めた専門性を活かせるような仕組みづくりを学校教育の中に取り入れていくことが、最終的には子どもたちの未来応援につながるのかなと考えた。

それから、〇〇委員から最初にご指摘いただいた情報連携の部分については、反省点である。私たちは非常にやっているつもりですが、それがなかなか理解されていない。アピールの仕方が出来ていなかったと反省している。間違いなく公立の小中学校間ではさまざまな連携はしているが、その辺をより一層深めることはとても重要なことである。自分の感想も含めてしっかりやっていきたいと思っている。

（会長）

大変多くの委員から、さまざまな貴重なご意見を頂戴した。もし、このあたりでないようなら、ただいま委員の皆様からいただいた意見を可能な限り中間報告に反映させたいと思う。私と事務局で調整させていただき、本日ご欠席の委員の方で強い思いを持っている委員もいらっしゃるので、確認したうえで中間報告という形で進めさせていただければと思うが、いかがか。

大変タイトなスケジュールで、〇〇委員にはおそらく睡眠時間を削って中間報告へ向けて、非常に貴重な調査結果をまとめていただいた。本日もまた、必

要なデータの裏付けを補強していただきありがたい。
　タイトなスケジュールであったことから、中間報告の中で今一つ足りないなというものが出てくるかもしれないが、まだ、最終報告が控えている。これから、事務局を中心に中間報告をまとめて、施策の実施状況など新しい動きも出てくるかと思う。その中で、追加されてくるものがあるかもしれない。今後、最終報告があるということで、ご了承いただければと思う。

(2) その他

(事務局)
特になし。

(会長)
議事は以上をもって終了する。